俺という意義

久里屋りぃた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺という意義

【Ｎコード】
Ｎ７７２２Ｘ

【作者名】
久里屋りぃた

【あらすじ】
服を着ることに疑問を持ち始めた少年と、それを取り巻く友達のバカな話。全裸を推奨する話ではありません。※ｐｉｘｉｖに掲載されていた作品の移行と、続きになります。

俺という意義

生命の起源とか、そんな難しいことを語りたい訳ではない。
正直そこら辺の話をしても、理解して貰えない事を知っている。
当たり前ってなんだ？
普通ってなんだ？
常識ってなんだ？
誰が決めて何処が基準なのか判らない、あやふやなモノに興味はない。
俺という存在をそれで定義づけられるのか？
全人類生きとして生けるモノ、そんなもので表せるだろうか。
疑問が疑念を生み、やがては己自身に問うてみた。
服を着ることの意味の始まりがあっても、終わりはあるのだろうかと。
生まれて直ぐはみんな裸なのに、数分後には布を纏っている。
ありのままの自分を見て欲しいの…。
いつか借りた少女マンガではそう言って、可憐な女の子が……。
そう何かがおかしいのだ、違和感に誰も気付いていない。
まさしくこれこそが、当たり前で、普通で常識なのだ。
ここ数日は頭を休ませることもなく、授業もロクに聞かずに考え倒した。
結論はまだ出ていない…ただ言えることは、新たな俺が目覚めそうってこと。
次の日から俺は全てを投げ捨てて、全裸で登校を開始した。

まだ自己紹介をしていなかったね。
、俺の名前は『絹多生地』と書いて『きぬたせいじ』と読む。
高校二年生の１６歳で彼女はいないが、小うるさい幼なじみがいたりする。

「誰が小うるさい幼なじみよっ！あんた馬鹿でしょ」
爽やかな朝だった。
「シカトかいっ！」
全裸でいても咎める家族はいない、何故ならば一人暮らしをしているからだ。
己に問うた事の答えを出す為に、実行に移したは良かったものの…
運悪くコイツ『綿貫美和』（わたぬきみわ）に見つかってしまった。
「見つかったのが、私で良かったわね」
「悲鳴あげてたくせに」
「あんたが全裸で現れたからでしょ！」
気さくな感じで挨拶したのに、失礼にも悲鳴を上げやがったんだ。
周りから人が来るや否や、こんな路地裏に連れて来るなんてよ。
もしかして俺…これから襲われちゃうのか？
「さっきから心の声が口から出てるわよ」
「美和…聞いてくれ。俺たちはまだ未成年だ…その、こうゆう事はお互いに」
「服着てから出直して来いっっっ！！」
蹴られた尻が思いのほか気持ち良かったが、決してドMではないと宣言しておこう。
なんだかんだで全裸の俺と、会話している美和は良い奴なのだ。
いつも側に居てくれてるから、気付かなかった思いやり。
納得してくれなくても良い…そうゆうモノだと頭の隅に置いて欲しいから。もしかしたら答えが導き出せるかもしれない。
「とりあえず、体育で使うタオルで下半身隠しなさい」
対応が早いというか、順応性に長けてるというか、俺の扱いに馴れてると言えばいいのかね。
建て前で腰にタオルを巻くことに同意して、しっかり合わせ目はお尻に持っていった。
自分が遅刻することを考えず、溜め息をつきながら対策を練っているのだろう。

本当は優しい女だって知っているさ。
「なぁ美和…なんで服を着るんだ」
「なんでって、恥ずかしいからに決まってるじゃない」
「言い方を変えよう。子孫を残すのは裸同士でするんだ…果たしてそこに羞恥はあるか？幸せに満ち溢れてるんじゃないか？」
長年成長を隣で見てきたお前にこそ、抱えている問題を打ち上げた。
他でもないお前にだけ、この全裸の俺を真っ直ぐ見て欲しい。
純粋な気持ちなんだ。
「二人きりと、大勢の違いなんじゃないの？」
「今は二人きりだ。お前と俺…だけだぞ」
「……バカ！とにかく、目のやり場に困るのよ！？」強い衝撃を受け、重大な事に気付かされた。
服を身にまとい過ぎて、裸を見るという日常が麻痺している。
すなわち普段見慣れていないモノを見るというストレス…。
簡単に例えるなら某アニメの声が、一斉に交代する位の違和感…。
単純なことに気付けないなんて、俺もまだまだだな。
顔を赤くしてブツブツ言っている美和に、感謝を込めて抱き締めてみた。

「ありがとう。お前のお陰で一歩近付けた気がするよ」
「キャッ、判ったから離れなさいよ！！…意識してる私がバカみたいじゃない」
「ん？顔が赤いぞ」
「アンタが全裸だからでしょう！！」

照れ隠しなんて、可愛い気あるじゃねえか。
仮に俺が全裸じゃなきても、お前は変わらないな。

良き幼なじみを持ったものだ。
さて、そろそろ学校に向かおうとするかな。

友情を無駄にする訳にもいくまい、先生には痴漢にあったんだって言っておこう、遅刻理由はそれだけで美和を労るだろう。

「待ちなさい。どこに行くつもり？」

「本業を忘れたのか？」

「え…あんた露出狂だったの？いや…あ、そのゴメンナサイ」

「これから学校にって…え、誰が露出狂なんだ？心配しなくても先生には、美和は痴漢にあって遅くなったと」

「その場でアンタが連行されるわっ！！」

意見の食い違いが始まった…そんな、俺は美和を思ってやる行動が、迷惑になるなんてな。

はははは……とんだピエロだ。

打ちひしがれている場合ではない、早く学校に行かなくては。

腕時計を確認すれば、1時間目が始まる五分前だ。

このまま行けばサボリのレッテルを貼られ、目を付けられた末には…。

『可愛い後輩くんよ。金、持ってるんだろ？出せよゴラァ』

『持ってないです先輩。俺は何も…』

『さっきから仕切りに気にしてる、そのポケットには何があるのかな？』

『いや、やめて下さいっ！！それだけは、あ』

『み、妙な声を出すな。ふ、取ったぞ』

『やだ、ばかばか、返してよ』

『やなこっ……た。お前これ……』

『だから嫌だって言ったのに』

『こんなもん…没収だ。一生返さねえ』

『酷い』

『バカだな。一生…お前も離さないって言ってるんだ』

『先輩…』

いがみ合う二人は、いつしか互いに恋をしていた…。
後輩と先輩…そして性別を越えた関係へ、それらは何の障害になんてなりやしない。
だって二人は愛し合って居るのだから。
「…送信っと。和希にメールしたから、とりあえず無断遅刻にはならないだろう」
「なんて送ったのよ」
「ひ・み・つ」
和希とは我らが最終兵器ピュアピュア青年『麻沼和希』と書いて、『あさぬまかずき』の事である。
即ちクラスメイト以上愛情未満だ。朝一番に俺と美和に、おはようメールをくれるのも彼である。
その返信を先ほどしたって話だ。
手の中の携帯が振動して、ディスプレイに麻沼の名前が表示される。
メールではなく電話を寄越してくるなんて、よっぽど寂しい奴なんだな。

良い声で挨拶しようと咳払いをしてから、通話ボタンを押したがツーツーと機械音しか聞こえない。

「そこ電源ボタン」
「……うん、とりあえず登校するか」
「服を着てからね」

登校まで、まだまだ掛かりそうです。
酷く喉の渇きを覚え、目に入った自販機に行こうとしたら引きとめられた。
腕に食い込む程の力に、熱すぎる眼差しは、並ならぬ決意が窺える。

生唾を飲み込んで、静かに息を吐き出した。
言わなくてはならないらしい…嘘も見抜きそうな、美和の綺麗な瞳に降参した。

「認めれば良いんだろう。俺が童貞野郎だってさ」
「急にな――」
「みなまで言うな。隠していて悪かった」
「今の生地は、何も隠せてないからね」

動揺の色すら見せずに冷静な美和が、キラキラと眩しくて直視出来なくなってしまった。
とゆう訳で、飲み物を買いに行こうかな。

「ダメダメ！誤魔化されないから！？」
「ちぇーケチんぼめ」
「私が行くから」

何度も俺の方を振り返りながら、一本の缶ジュースを買ってダッシュで戻ってきた。渡された缶ジュースは冷たく、熱くなった肌には気持ちいい。

これで満足したでしょうと、掴まれた腕は痕がつくほどに痛いが。
ふふ一人じゃ怖かったのだろう。
いつまでも子供な美和が、愛おしくて堪らないぜ。

「勝手にここから離れちゃダメだからね。スポーツタオル腰に巻いただけでも、十分に捕まるわよっ！」

心配性な美和の言葉が照れくさくて、缶のプルタブも上手く開いてくれない。

5回目でようやく外して、喉を潤すことが出来た。
口に広がる甘い桃の味は、一番好きな飲み物だ。
さり気ない気遣いが嬉しくて、半分飲みかけた所で缶を渡す。
この味を一人占めではなく、二人で共有したくなったのだ。

渡そうとした缶を突き返され、突き出して突き返され。
一種の攻防戦が勃発して、ついには指相撲にまで発展した。
気遣いをくれた美和に、嬉しさを半分あげたかっただけなのに…。

握った手が自分より小さい事に気づき、勝負そっちのけで両手で触ってみた。

「な、なにしてるのよ！」
「小さいな、美和の手…可愛い」
「か、かわ、かわ」
「革で出来てるのか！」
「違うわっ！離してよ…疲れたから、その…そう！喉が渇いたわ」

最初からそう言えばいいのに…そっと持たせようとしたら、拳を作って拒否を示した。
二度目の押し問答を繰り広げていると、背後から独特の足音が聞こえてくる。
タッタッタタとリズムがおかしな足音の主は、我らが誇る純粋の鏡。

くりんくりんな癖っ毛に、女よりも大きな瞳。
可愛い可愛い、存在が涙を溜めて抱きついてきた。
くるくる回して、再会を喜ぶ。

「和希！久しぶ」

「せーちゃん！水くさいよ、なんでもっと早く相談してくれなかったの！？僕は…僕は…」
「和希…世の中には、知らない方が良い話があるんだ」
「嫌だ！僕らは友達でしょう？好きになった相手が…お、男でも、嫌いになったりしないよっ！！」

ジャリと背後でまた聞こえてくる音。
振り向かなくても分かる、怒りのオーラが背中を貫いてるから。
やんわり和希を宥めて退かせると、四の地固めで攻撃したきた。

「ギブブブビビ」
「さっきのメールを見せなさい！！」
「他意はなかっ、あ、ぐあ、む、むぎぃ」
「和希…忘れなさい。コイツのメールも全て」
「みーちゃん。でも…」
必死の説得を聞きながら、軋む関節を心配した。
こんなに強くされたら、新たな俺が目覚めてしまいそうだ。
ほんのお茶目パーティーだったのに…さ。

それよりも和希はどーして俺の格好に、ツッコミしてくれないんだろうな？ここで聞いてしまったら、男が廃る。
甘んじて致し方なく、放置プレイを受け入れよう。

和希が鈍いのは知っているし、ツッコミ出来ないタイプとも心得ている。
つまり元から分かった上で、放置されるのを覚悟した。
これはズバリまったく新しい、遊びなのだ感動したか？

「…ふぅ……」
「待ちなさい。なんで少しずつ、タオルがずり下がってるの？」
「…春のニューファッ」
「却下します」

言い切れない内に一蹴されてしまう。
寸止めで入ってくるなんて、まさか美和は手練れか？

注意を逸らされて、油断している時だった。

「そういえば、せーちゃん制服は？」

キタァァァァァァァァァァァァァァァ！
待ってた待ちくたびるたよ、一生このままかとワクワクすらしていたよ。
素晴らしい間の取り方…さてはお主、第2の手練れか？

「ふふこれはな、究極クールビズを求めた人間の……成れの果てさ」
「すわち変態ね。和希は真似しちゃダメよ」
俺にはムチで和希にはアメを渡す。
もしかして……じょ、おうさ…ま？

「すみません。あなたの忠実なる下僕の分際で」
「ひゃ、なに抱きついてるのよ！」

ジタバタ暴れるも抵抗が弱く、むしろ柔らかい位で。
チャンスは一度しかない、これを逃してなるものか！

「今の内だ和希…学校に遅刻の旨を伝えてくれ」
「今日は午前で終わりだよ」

「え？」
「ん？」

三人の間に長い長い沈黙が訪れ、やがて強い風が吹き荒れ、腰に巻いたタオルが空に舞っていく。

全裸で登校の夢が、一つ霞んでいった……。とてつもない思い違いは、時として人間関係に亀裂をもたらす。
修復するのはとても困難であり、大きく裂かれてしまう事もあるだろう。
お前が少しでも迷ったり、信じなかったら、修復なんて出来る筈がないんだ。
油断大敵って言葉もあるように…。

『もしかしたら』なんて、気持ちは捨てしまえ。
待っているだけじゃ、不確かな要素は時に自分への刃になりうる。
捉えかた次第でも、変化すると知っていたか？

お前の背中を押してくれるんだよ。
『もしかしたら』って期待が、勇気をくれるんだ、自分を強くする魔法にだってなる。
マイナスに考えるなとは言わない。
けどマイナスだけを考えるなとは、言わせてもらいたい。
どんな事だってプラスは見いだせる。
一人でダメなら、他の誰かに相談しろ。
それが嫌なら必死に考えろ、相手を思え…お前なら出きるよ！

昨日見た夢を思い出して、渋い茶を啜った。
こうして俺は服を脱ぐ不安を勇気にかえ、一糸纏わぬ姿…全裸になったのだった。

羞恥心も社会への抵抗感もゴミ箱に投げ捨てて、新たな俺としての一歩が始まろうとしていた…の、だが。１日目は早々に全裸で登校が、奇しくも不発に終わってしまうった。
終いには腰に巻いていたタオルも、風の悪戯で宙に舞い吹かれていく。

全力で取りに行こうとしたら、美和に先を越され。
友達思いの奴に感動して抱きつこうとしたら、綺麗な右ストレートが飛んできてＫＯ。

落ち着こうじゃないかと二人を部屋に誘い、テーブルを囲んで団欒している所だ。
強引に服を着せられて、な……。

一つの可能性を否定することは、一つの結果を潰すことと同じである。
つまりだ…俺が服を着ている状態は、非常に大変な事態なのを理解していただきたい。

己の全てをかけて全裸である意義を証明する…果たして今まで成し得た奴は居るのだろうか？
否！！存在しないからこそ、疑問に持ったに違いない。
神様は信じていないが、お告げの一種であるのだろう。

一枚、一枚と脱いだ、今朝の感覚が忘れられない。
しがらみから解き放たれて、肩が軽くなった時の気持ち。

背中に羽根が生えて、空高く青空の中を飛んでいけそうな…。
勢い込んでベランダに出ると、手すりにいた雀と目があった。

「俺は哺乳類だったぁぁぁぁぁ」
「ツッコミ所が違うわ！きゃっ！？脱がないで！」
「せーちゃん、せめて僕も脱ぐよ」
「和希……」
「こっち見ても、私は脱がないわよ！！！」

どうやら説得出来たのは、一人だけのようだ。

人数が居ればいるだけ意見が増え、活性化へと繋がると考えたのだが。
一番の難関『美和』には通じないようだ。
しかし有り難い、貴重な存在だと知っている。
脱がないのはむしろ正解で、最後の砦には強固な意志が必要だからな。

「美和…今後とも俺の側にいてくれよな！！」
「……あ…当たり前…でしょ」
「僕には？」
「和希…俺から離れるなよ」
「せーちゃん」

熱い抱擁を二人にぶつけようとしたら、瞬きもしない間に視界は天井を向いていた。
油断をしていたよ。
まさかこの俺が床に背中をつけられる日が、来るとは…な。
はははは遂に後継者が現れたか……本当にスミマセン、美和さん離して下さい。
一本背負いなんて、どこで覚えたんですか。
掴まれ手首の骨に圧がかかり、怒りを伝えてくる。

ごめんなさい、美和だって女の子だよな。
いくら俺らが親友だって、裸は紳士の嗜み。
そんなことにも気づけない、愚かな俺でごめんな。

「あんた…可愛いければ、お…男でも」
「うん？」

よく聞こえなくて聞き返したら、青ざめた顔をした美和が後退りした。
胸元を抑えて、浅い息を繰り返している。
持病なんてないはずなのに、知らないだけで大変な病を煩ってるんじゃ。
焦るな、落ち着け俺。

起き上がって呼吸を整え、ゴクリと唾を飲み込んだ。
和希と目でコンタクトを取り、頷き合って近づいた。

「美和…ごめん、俺気付いてやれなくて」
「ごめんね、みーちゃん。僕がもっと早くに気付いてたら」
「いいのよ……いいの。そうゆうの分かってる方だし。ただ……急だったから…混乱しただけ。心配いらないわ」

話がなんとなく噛み合ってないが、どうやら危惧していたことではないようだった。
隣にいた和希と安堵して微笑み合っていると、低い声でぼそりとした言葉を俺は聞こえていなかった。

「どっちが下かしら」

新たな可能性に目覚めた美和のことを、和希も俺も知る由がない。
深い深い溜め息の末に、立ち上がった美和が言った。

「服を脱ぎたいなら、私がいないとこにして頂戴。あと…あんまり和希に甘えるの、やめなさいよ」
「…美和……大好きだ、いや愛してる！！世界一いや宇宙一！人類一だよ！？もう俺は美和なしじゃ、生きられな」

最後まで言葉を紡ぐことは叶わなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7722x/

俺という意義

2011年11月17日18時44分発行